

## (第91回) 歌舞伎「三月大歌舞伎」 3月12日歌舞伎座「昼の部」

昨年秋の歌舞伎観劇を所用で欠席した為、一年振りの歌舞伎座訪問であり、地元へ帰ってきたような懐かしい感じがした。外国人観光客、学生団体客が少し増えた印象を持った。3階の土産物店で甘味処を訪れ、歌舞伎座でしか手に入らないものを入手するのも我が家の歌舞伎座訪問の楽しみの一つになっている。

今回から松竹、アイアン・クラブのご厚意で、当日の昼の部か夜の部を選べる事となった。どちらにするか迷ったが、昼の部の今回の演目「国性爺合戦」、「男女道成寺」、「芝浜革財布」はどれも有名であるにも拘らず、ま



だ観た事がないので一度観てみたいと思い、昼の部を選ぶ事とした。また、2年前のアイアン・クラブの観劇の時が、五代目中村雀右衛門襲名披露であった。その時に中村雀右衛門丈の楽屋にお邪魔する機会を得て、お話を伺った事もあり、今回、「男女道成寺」が四世中村雀右衛門丈七回忌追善狂言で、当代が先代の得意とした白拍子花子を演ずるのを楽しみにしていたのも昼の部を選んだ理由の一つである。

「男女道成寺」は四世中村雀右衛門七回忌追善狂言として今回上演された。歌舞伎には道成寺物といわれる作品



群がある。「京鹿子娘道成寺」「豊後道成寺」「現在道成

寺」「二人道成寺」「男女道成寺」等がある。今回、上演された「男女道成寺」は四代目の得意とした道成寺物で当代の中村雀右衛門丈も直接先代から教わったと言われている。所謂、安珍と清姫の伝説から始まりとされるこの作品の見所は、何ととっても常磐津と長唄の何とも心地良い響きに乗った白拍子の舞にあるのではないだろうか。2年前にインタビューさせて頂いたときにも雀右衛門丈は「歌舞伎とは読んで字の如く、歌あり、舞あり、技ありです。」と仰っていた。正に道成寺の白拍子役は女方の集大成といえるのだろう。

雀右衛門丈は歌舞伎座のホームページのインタビューで、五代目を襲名してからの2年間を「少しは何か見られるようになってきたというか……。いろんなお役をさせていただくことで、知らないうちに動きやせりふがついてきて、自然と所作、言い回しが出てくるのだと思います。」と語られている。今回は狂言師左近の松緑と意気のある風格のある白拍子役を演じた。3月13日の日本経済新聞の歌舞伎欄でこの度の雀右衛門丈の演技を「早くも七回忌という四代目雀右衛門追善に当代が「男女道成寺」を狂言師左近に松緑を得て着実な実力の蓄積を示すのが目を奪う。全段の眼目「恋の手習い」の件(くだり)をじっくりと踊るのが役者雀右衛門としての実力」と評している。

歌舞伎の演目は日本の伝統芸能である能、浄瑠璃、落語等を題材にして作られているものが多い。今回の「国性爺合戦」は、近松門左衛門による人形浄瑠璃として正徳五年(1715年)に大阪竹本座で初演されたのが始まりとされている。翌年には歌舞伎でも上演、歌舞伎ならではの様式美、荒事芸を取り入れ、現代に至るまで、近松門左衛門の代表的な人気狂言として親しまれてきている。

清の時代の中国での明の再興を志すスケールの大きな物語である。中国人を父、日本人を母に持つ和籾内(愛之助)は両親の父老一官(東蔵)、母渚(秀太郎)を連れ、明国再興を志し、中国へ渡る。そこで生き別れた錦祥女(扇雀)、その夫であり、韃靼王の配下にある五常軍甘輝(芝翫)に出会い、彼らが明国再興に向けて様々な試練を乗り越えて立ち上がる物語である。家族愛、夫婦愛に満ち溢れ、豪快な立ち回り、迫力満載の荒事芸、

愛之助始め役者の熱演等もあり、見所満載の演目である。劇中に平昌五輪で話題になった日本女子カーリングで話題となった「モグモグタイム」「そだねー」を取り入れているのもご愛敬。

「芝浜革財布」は落語の人情噺から生まれたものと言われている。初演は大正11年(1922年)市村座で六世尾上菊五郎主演で行われ、大好評を呼び、今日まで世話狂言の代表作として親しまれている。



江戸時代、棒手振りの魚屋の政五郎(芝翫)は生来の酒好き。そんな彼が芝浜で金五十両の入った革財布を拾う。その祝いと仲間を呼んで酒盛が始まり、いつものように大騒ぎで二日酔い。翌日、謝金取りの催促に拾った革財布から払うようにと女房おたつ(孝太郎)に命ず

るが、おたつはこれを断る。政五郎の将来を案じたおたつは財布を拾ったのは夢で、大酒を飲んで騒いだ事だけが真実と切々と諭した。おたつの言葉にこれまでの行いを詫び、酒を断ち、真面目に働く事を政五郎は誓う。

それから3年後の大晦日、懸命に働いた政五郎は表通りに店を構えるほどの立派な魚屋になっていた。もう真実を話しても大丈夫だと思っていたおたつは財布を拾ったのは夢ではなく真(まこと)のこと。隠していて申し訳ないと政五郎に謝るが、真相を知った政五郎はおたつの計らいに感謝する。拾った五十両は火事で焼け出された人々へ寄進する事にする。そして3年間絶っていた酒をおたつの酌で飲み、新年を迎えるという夫婦愛の心温まる世話狂言である。

原作の落語ではおたつが政五郎に酒を勧めると、始めはこぼんでいた政五郎だったが、やがておずおずと杯を手にする。「うん、そだねー。じゃー、飲むとするか」といったんは杯を口元に運ぶが、ふいに杯を置く。「よそう。また夢になるといけねえ」

おあとが宜しいようで。

なお、歌舞伎(昼の部)のご参加は会員、ご家族で13名でした。

(織田 文雄・記)

以下余白、